4. 考察

(1)呼称

・地域的な差異　お話を伺った21名中、19名が「サルケ」と称している。稲垣周辺ではこの呼称が一般的であると思われる。「サラケ」「シャラケ」と称する者は3名(うち1名は「サルケ」とも称しており、カウントは重複)あった。これまでの聞き取りではつがる市の西側地域にこの発音が多い傾向が見られたが、この3名のうち西側出身の者は1名(牛潟)に過ぎなかった。

・世代的な差異　今回の聞き取りのなかでは、見いだせなかった。

(2)年代・普及

繁田では、昭和20年代まで使用していた者4名（繁田②⑧⑨⑬）、昭和30年代まで使用していた者は7名（繁田①③④⑤⑦⑩⑪）、昭和40年代以降も使用していた者は1名（繁田⑦）あった。使用の末期はおよそ昭和30年代であったものと思われる。これまでの調べでも同様の傾向がみられる。

昭和20年代前半（繁田②⑨）に使用しなくなった家もあれば、昭和39年以降もさかんに使用していた（繁田⑬）という家もあり、同じ地域でも家庭によって開きがあることがわかる。

穂積では、昭和20年代まで使用していた者は1名（穂積⑭）、昭和30年代まで使用していた者は4名（穂積⑰⑱⑲）（繁田⑥※穂積での経験）であった。使用の末期はおよそ昭和30年代であったものと思われる。

(3)性質や分布についての認識

A,定義

・根である　サルケは「草の根」であると説明する人が21名中7名いた（繁田①②③④⑧⑪穂積⑭）。また、単に「根」であるという人が2名いた（繁田⑮）（繁田⑥※穂積での経験）。多くの人々がサルケは「草の根」または「根」であると考えていることがわかる。さらに、その「草の根」が「長い時間をかけて押されて固まったもの」（繁田②）、「蓄積したもの」（穂積⑭）であるとして、生成の過程について説明する人もいた。サルケが「時間をかけて堆積したもの」であると認識していることがわかる。また、「草がよく生える場所に豊富」（繁田④）、「草が生えていた土地の下にある」（繁田⑧）という人もいるが、この場合「草が生える場所」とは湿地のことを指している。その「昔の草などが沈殿して固まったもの」（繁田⑩）、「ヤヅのツツ」（湿地の土）（繁田⑬）であると説明する人もおり、サルケは湿地と関係があると認識されていることがわかる。

・草や藻である　・腐ったものである　・腐らずに堆積したもの　　他地域でみられた左のような回答はなかった。

B,分布

・地域的ひろがり　サルケがちな土地を「サルケが強い」（繁田⑨）という。サルケの「強弱」は次のように認識されている。繁田から4-5km（北方）のカヤヤチの下（繁田⑩）、穂積より北方の田（穂積⑰）、穂積周辺はサルケは少なく田には良い。繁田方面にサルケは分布している（穂積⑳㉑）――これらの証言には、穂積よりも繁田方面にサルケが多いという認識が示されている。また、繁田周辺は豊富だが下繁田方面に向かうに従い少なくなる（繁田⑨）、神田橋の南方に分布（繁田③）――これらの証言には、繁田よりも北方に向かうに従い、サルケが少なくなるという認識が示されている。さらに、岩木川方面（東側）に向かうにしたがい、土が多くなりサルケが少なくなる（繁田⑨）――という証言には、繁田の東側方面に向かうに従い、土混じりとなりサルケが少なくなるという認識が示されている。総合すれば、繁田集落周辺がサルケに最も富む場所であり、その北方、南方、東方に向かうに従いサルケが少なくなると考えられているようである。繁田の西側については、C質的差異・質的評価の項にあるように、田光沼、山田川方面のサルケが良質であるという認識が示されている。

・上下のひろがり　サルケは表土を取り除いた下にあり（繁田⑬、穂積⑳）、繁田⑤では地表から30-40cm、穂積⑭では50-100cmの深さにサルケの層が分布しているという。後者は表土の層厚が大きいが、サルケの上に十分に自然の覆土がなされ「穂積周辺は田として一等地である」（穂積⑳）という証言につながっている。また、サルケの層自体も、場所により層厚が異なる（繁田②④）という。繁田周辺は、表土が薄く、かつサルケの層厚も豊かでサルケの採取地としては適していたことが、サルケの盛んな利用につながったと考えられる。

C,質的差異、質的評価　サルケの質の違いを「品種」の違いとして説明する人がいた（繁田④）。その「品種」の違いには、二つの視点がある。さらに、一つ目の視点では評価がふたつに分かれる。

・「土混じりのサルケ」か「草の根ばかりのサルケ」か――この視点では、前者がよいとするものと、後者がよいとするものの両方がみられた。前者が良いとするものは、「ツチマジャリのサルケ」のほうが、燃えにくいが火持ちがよく、良質であり（繁田②④⑨）、草の根ばかりのものは土が少なく燃えやすいが火持ちが悪い（繁田④⑨）と説明する。いっぽう、後者がよいとするものは、「ネンバマジャリのサルケ」（ネバチチの混じるサルケ）や土が多く重いものは悪いサルケであり（繁田⑫穂積⑭）、土が混ざらないものが「ホントのイイサルケ」で良質である（繁田⑤⑫穂積⑭）と説明する。質的差異を判断する視点は共通しているが、評価が正反対である点に注目したい。

・「堅いサルケ」か「柔らかいサルケ」か――この視点では、前者がよく後者が悪いとされた。「かでえいいサルケ」は火持ちがよく熾も残るが、「柔らけえサルケ」は着火しやすい半面火持ちが悪いという(繁田②⑧)。そして、堅いよいサルケは保管時の積み重ねによる圧縮によって生まれるという見解もあった(穂積⑭)。

これらのサルケの質的差異は、水分の差異、あるいは採取場所の差異として説明される。前者については、水分が多い場所では土混じりのサルケがあり(繁田⑨)、排水の良い田の下のサルケは堅く締まっていた(繁田⑧)という。いずれも「良いサルケ」であると使用者は評価している。後者については、田光沼方面、山田川沿いの北方のサルケが良質で、岩木川近辺のサルケは悪いとする評価(穂積⑭)がみられた。

(4)入手

・自分の土地から自分で／他人の手で

所有する田や湿地から(繁田①②④⑤⑭)、あるいは採掘権を購入したヤチから(穂積⑳)、自家で採取するという場合が多い。そのなかには、未開発の湿地を小作人を使って田地として開発させ、サルケを採取させたという人もいた(穂積⑭)。この証言と対になる証言が木造柴田で記録されている[38]。小作人が田地の改良を口実にサルケを採取し、地主にいっぱい食わせたというエピソードである。

・購入する(売買と流通) 今回の聞き取りではサルケを売買したという人はいなかった。

(5)採取

サルケの「採取」には次のような工程がある。①切り込みを入れる－②表土を除去する－③サルケを切り取る－④引き上げる－⑤手渡す＝受けとる－⑥移動させる－⑦置く－(⑧積む)。ただし⑧は「乾燥」の工程に重複する。このような一連の工程のなかで、①-③のを作業をとくに「採掘」と呼び、①-⑧全体を「採取」と呼ぶことにする。「採掘」は「採取」の工程の一部である。

A,目的

・自家用燃料として用いるため(計3名) 燃料として使用するために採取したという人は、繁田①⑦穂積⑳のわずか3名であった。このうち、繁田①は「田地の改良という発想はなく、燃料の確保が主目的である」と明確に答えている。しかしこれは全体からみれば珍しい考え方である。

・土地改良のためであり、サルケは副産物である(計7名)

土地改良が主たる目的であり、燃料は副次的な産物であると明確に答えた人は繁田③⑫穂積⑭の3名である。繁田③は「捨ててしまうのがもったいないから」燃料に活用したという。また穂積⑭は植林地から柴も入手できサルケ以外の燃料にも恵まれていたことや、未開発の土地を所有していたことなどの理由から土地改良を主目的としていた。

土地改良と燃料の採取を兼ねると答えた人は繁田②④⑩穂積⑲の4名で、繁田②の場合は稲作を中止(「仮の減反」と説明)して客土をおこない、繁田④では別の場所から土を持ってきて客土したという。いずれも土地改良を重視していることがわかる。単に燃料を採取するだけであれば、上げた土を戻せばよいのである。サルケの採取については、一般的に燃料の確保が第一の目的であると語られることが多いが、必ずしもそうではないことがわかる。

水路の整備 水路の整備にともなう副産物であるという回答は今回はみられなかった。

B,時期

・田植え前 「田んぼに(稲を)植える前にやった」(繁田④)、「たんぼに取りかかる前に」(繁田⑤)など、田植え前と答えた人は6名(繁田④⑤⑧⑩⑫⑬)である。

・田植え後 「田植え終わって暑くなってから」(繁田②)、「7～8月ころ、お盆前」(繁田⑨)という人は2名いた。

・収穫後(＋田植後／収穫後など) また、「田植えが終わって暇なときや、人によっては冬や秋」(穂積⑭)、「田んぼ(稲作が)終わってから秋遅く」(繁田③)など、田植え後や、それに加えて収穫後にもおこなうケースがみられた。いずれにしても、農繁期を避けておこなわれる作業であった。

・通年 今回の聞き取りでは通年でおこなったという回答はなかった。

C,場所

・湿地や原野 湿地や原野からサルケを採取すると答えた人は、繁田①③⑬穂積⑭⑱⑳の6例であった。サルケが採れる湿地のことを「サルケヤチ」「サルケヤヂ」と言った(穂積⑭⑳)。「サルケヤチ」という表現はこの場合一般名詞として用いられているが、つがる市木造大畑付近には地名としてのサルケヤチがあった[39]。サルケヤチ付近では「ヤツベゴ」と呼ばれる奇怪な生き物が発見されたという記録がある[40]。自家所有地である場合(繁田①、太田光方面に所有)もあれば、共有地に採取権(採掘権)を有する場合(穂積⑳)もあった。

・田 同じく6例あった(繁田②④⑤穂積⑮⑰)(繁田⑥※穂積での経験)。サルケに富む田のことを「サルケ田」といい(穂積⑮)、「田んぼでなければサルケはない」(繁田⑥※穂積での経験)と考えている人もみられた。

D,主体

・男性がおこなった　一般的に、切る作業の主体は男性であると語られることが多い（繁田②③⑦⑨⑩）（繁田⑥※穂積での経験）。「女性は参与しない」（繁田②）、「女性ではうまく切ることができない」（繁田⑩）と語る人もいた。また、自身も運搬を手伝ったが、他家では一般に男性が主体である（繁田⑨）という証言もある。

・男性のほか、女性も子どもも手伝った　切る作業は男性中心であるとの証言が多いなか、「父と本家の兄に加え、自身の母も切る作業を手伝った。また、（切る作業まではしないけれども）小学校3～4年生ころには、切ったものをフォークで持ち上げたり、運んだりする手伝いをした」（繁田⑨）という証言があった。女性もサルケ切りに参加したという。また、運搬について女性が手伝ったというケース（繁田⑬）や、子どもが手伝ったというケース（繁田①⑧⑨）がみられる。サルケの「採取」は、切る作業だけでなく、切ったものを持ち上げ、水を切り、積み上げるという一連の作業から成り立つことを考えれば、従来の報告[41]でみられるような男性主体の描写は、女性や子どもたちの役割を見過ごしていることに注意する必要がある。

・採取した経験はない　採取した経験がないと語る人は3名いた（穂積⑭⑰⑱）。いずれも稲垣町穂積で生まれ育った方々であるが、穂積⑭は小作人を使用する家だったこと、穂積⑰は昭和30年生まれであることなど、家庭や世代などが要因である。

E,方法　手順と用具を「採取法略図」として下に示した。矢印ひとつ分が、切り込みの動作の1回分をあらわす。たとえば垂直方向に、№1は800㎜の切り込みを1回、№9は200㎜の切り込みを3回おこなうことを意味する。

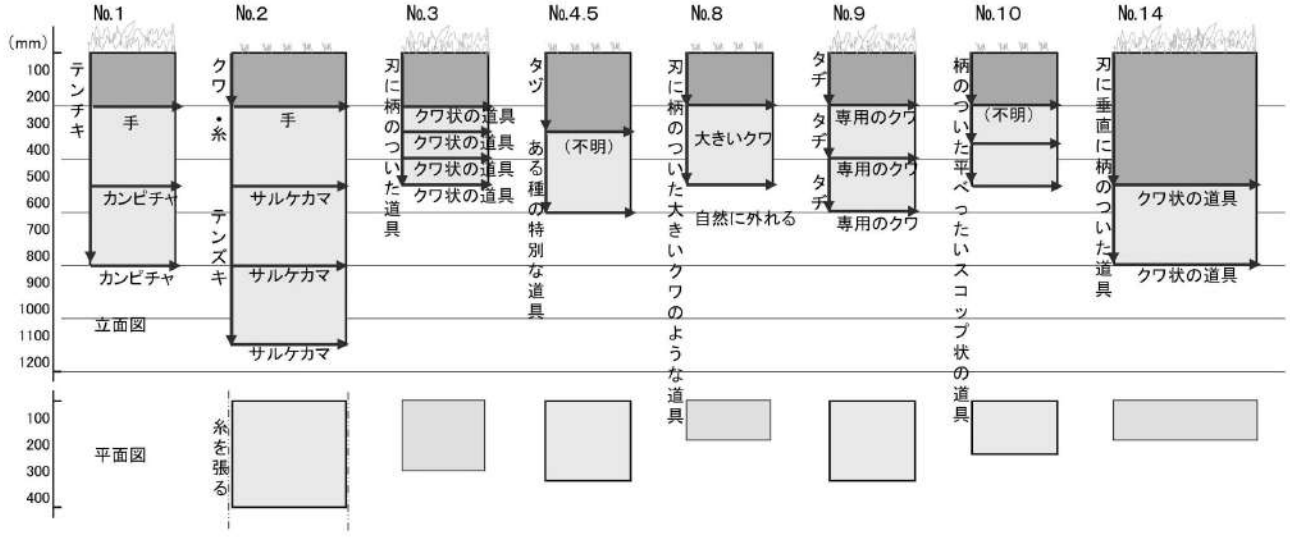

表1）採取法略図

・表土除去　サルケを採取するには、田地であれ原野（湿地）であれ、表土を除去する必要がある。垂直・水平方向に切り込みを入れる道具については上記略図に示した。そのなかで、「手」を用いる場合が2例（繁田①②）みられる。また、表土除去の作業で入れた切り込みが、サルケ本体を掘り上げる作業に連動する場合としない場合がある。タヂのような道具では深くまで一度に切り込みが入れられないが、テンズキでは一度に1m近い切り込みを入れられる。切り込みの作業に用いる道具にも関連している（表土の処理については別項参照）。

・泥炭層の除去および切り込みと引き上げ　表土除去ののちに糸を張って、垂直方向の切り込みの目安とする場合があった（繁田②）。この切り込みのことを「キズ」と称した（穂積⑭）。キズは、40-50㎝間隔に縦長に切り込み、横に同じ間隔で切り込みを入れる（繁田②）、幅30㎝間隔に7～8mの長さで3本、それに垂直に交わるように幅30㎝間隔で横に5本入れるという例（繁田⑨）や、30-40㎝間隔で縦長に切れ目を入れ、横に15㎝間隔で切れ目を入れていく（繁田⑧）、50㎝間隔で縦長に切れ目を入れ、横には15-30㎝間隔で切れ目を入れていく（穂積⑭）などの具体例が示された。

水平方向の切断にはサルケ専用カマの使用（繁田②）、クワの使用（繁田①③⑧⑨穂積⑭）がみられた。このクワの使用は、筆者のこれまでの他地域での聞き取りではあまり聞かれず、この地域の特徴的な傾向である（本文p.3写真参照）[42]。

また、道具を使う必要がない（自然にはずれる）という証言もある（繁田①⑧）。これは、泥炭の異方性についての知識を応用したものである。男性はサルケに「目」を入れるという表現を用い、底面を切らなくても「カパカパと」採れると証言している。稲垣繁田地区の南方にある木造柴田（しばた）地区の男性もサルケには「目」があるという[43]。目を利用した採取は上から見て奥行きがそれほど厚くない場合（上からみて長方形に採取される場合）には目に沿って「自然に外れる」（倒れる）ため有効であるが、水平方向に奥行きのある採り方（上から見て正方形に採取される場合）では道具による切り込みがなければ難しいのではないかと思われる。

段数は1段から3段までにわたり、田地にすることが目的なので1段にとどめた（穂積⑭）という証言があるほかは、深さに関する説明はなされなかった。

引き上げにカンピチャ(クワ)を使用する(繁田①)という証言は、水平方向の切り込みにクワを用いるこの地域ならではの方法である。サルケが利用された時代の末期には、引き上げにフォークを用いた(繁田⑨)という証言があった。道具を使うとアカススケダ水に入らずに済むのだという(繁田①)。浮力を利用して手で引き上げるという証言もあった(繁田②)。引き上げに手を用いるのは他地域では一般的である。

繁田①の男性は、カンピチャの柄は非常に見つけるのが難しいと感慨深げに語る。右図は18世紀後期に記されたものだが、この絵に示されるような農具の柄は「ヒバやホオの木でつくるが、これらの材を山に行って見つけるのに、ひじょうに苦労した」[44] といわれる。

『奥民図彙』より

・サイズ　前ページ「採取法略図」参照

・範囲「昔の田の一枚のサイズの1/2-1/3」(繁田⑤)の範囲という例が示された。

・表土の処理と客土　サルケヤチのクサの下によい土があった(穂積⑳)ので、すでにサルケを採取して低くなっている場所にその土を落として埋めた(繁田⑧穂積⑲)が、廃棄する場合(繁田①)もあった。表土を取り除いたのち客土する場合(繁田④⑤穂積⑳)には、土を山(繁田④)や岩木川(繁田⑤)などから運び入れた。土を戻さず放置する場合には、「サルカィ穴」「サルケ穴」(穂積⑲)と呼ばれる深いぬかるみの穴になった。

・作業衣　時代差を考慮しなければならないと思われるが、草履、ワラグツを履き、ワラのすね当て着用した(繁田⑨)という場合もあれば、「ゴムやトクナガのようなものはないので、ズボンを穿いた。我慢できるくらい温かくなってからおこなった」(繁田⑧)、「トクナガを履いた」(繁田②)という場合もあった。

(6)乾燥

・場所　田のクロに積むという事例が4例(繁田②⑤⑩⑬)、堰の近くなど採取場所の近くが2例(繁田③穂積⑲)である。乾燥させてから自宅へ運ぶほうが合理的だからである。これらに対し自宅近くで乾燥させる事例もあるが(穂積⑳)、それは住居と採取場所が近い場合である。

・積み方と工程　採取したサルケは積み重ねて乾燥させた。段数は、2段(繁田①)、4～5段(繁田⑨⑩)、5～6段(繁田②⑤⑧⑬穂積⑭)であった。2段重ねのことを「フタマギ」と言った。高く積み上げない理由は風で倒れないための配慮であると語る人もいる(繁田⑨)。多くの場合、互い違いに煉瓦のように積んだり(繁田②③⑤穂積⑳)、サルケの塊を間隔をあけるようにして積み重ねたりした(繁田③⑤⑧⑩)。すき間をあけないという事例もあった(穂積⑭)。また、互い違いに三角形に積み重ねた(繁田③)という証言もあるが、おそらく島のように積んだものだろう。

・時間

人為的操作を加えての短期集中型　乾燥を促すために途中で積み直し(マギガエシ)をおこなった(繁田①②⑧⑬)。この作業は子どもや(繁田①②)女性も(繁田⑤)手伝った。ただし、重くて女性にはできないという話者もいる(繁田⑬)。

放置による長期自然乾燥型　他地域でみられるこの類型についての証言は今回得られなかった。

(7)運搬

・タイミング

乾燥後に運搬　乾燥させてから運搬する場合が圧倒的に多い(繁田①②③④⑤⑧⑨⑩⑬穂積⑭)。重量が軽くなり合理的だからである。

運搬後に乾燥　運搬後に乾燥させる事例は1例であった(穂積⑳)。

・方法

人力による　3～4個のサルケを背負って運搬した(繁田①)、ソイコで2～3マルを運搬(繁田②)、背負って運搬(繁田④)、ショイコで運搬(繁田⑧)、ソイコで1マル(10枚)を運搬(繁田⑬)、ハシゴで1マルを運搬(穂積⑭)などの事例から、ショイコ(ソイコ)を使用して1～3マルほどを背負って運搬したことがわかる。

畜力による　馬が入れない場所は上記の方法で運び、農道で積み替えて馬に牽かせる場合も多い。「カナグルマ(マグルマ)に積み替えて馬で運搬した」(繁田②)、「馬やリヤカーを利用した」(繁田③)、「(人力のほか)馬も利用した」(繁田⑧)、「馬で運搬した」(繁田⑨)などの事例である。運搬作業は、子どもも手伝った(繁田①③⑧)。

運ばない　今回の事例では、運搬しないという事例はなかった。採集地と使用地が離れているためである。

束ね数(マルキ)　5枚一束(繁田②③⑨)、5～6枚一束(穂積⑭)、10枚1束(繁田⑬)という証言から、繁田では1マル5枚が標準的だったのではないかと思われる。更に具体的にこの1束の重さが30kgで、2～3マルを背負ったという証言もある(繁田②)。

(8)保管　小屋（繁田②⑩⑬穂積⑭）に保管する場合もあれば、屋敷のそばの広い場所（繁田④）や、家の裏手（繁田⑨）などの屋外に保管する場合もある。家の裏手に保管するのは「家の前では体裁が悪い」（繁田⑨）からと語る。後者では積み重ねた上にムシロのようなもの（繁田⑧）やワラ、カヤ（繁田⑨）などをかけた。高さと奥ゆき、幅2mに積み上げ、これが1年分の量であった（繁田⑨）。また、積み重ねて保管する過程で、厚さ15cmほどのサルケが10cmほどに締まり、火持ちがよくなるのだという（穂積⑭）。

(9)用途

紙数の関係上、表2「燃料の変遷に伴う飯炊きの設備と道具の変化」による表示と、その補足説明にとどめる。

地域	No.	採暖	炊飯	その他の調理
繁田	①	炉[サルケ]→(S29)マギストーブ[サルケ]	炉[サルケ]＋ナベ→(S29)マギストーブ[サルケ]＋ナベ	握り飯:炉[サルケ熾]
繁田	②	イロリ[サルケ・ジャッパ木]	イロリ[サルケ・ジャッパ木]＋ナベ	煮物・焼物:炉[サルケ・ジャッパ木]＋ナベ
繁田	③	イロリ[サルケ]→ストーブ[サルケ]	イロリ[サルケ・カヤ・ワラ]＋ナベ	↑握り飯:炉[サルケ熾]
繁田	④	シボド[サルケ]	炉[サルケ・カヤ]＋ナベ	
繁田	⑤	シボド[サルケ]	炉[サルケ]＋ナベ	
繁田	⑥	シボド[サルケ]	ストーブ[サルケ]	餅:シボド[サルケ]
繁田	⑦	マキストーブ[サルケ]		
繁田	⑧	シボド[サルケ]	冬:シボド[サルケ]／春-秋:シボド[ワラ・ヨシ・カヤ]	握り飯・魚・エビ:シボド[サルケ]
繁田	⑨		炉[サルケ・カヤ・ワラ]＋ナベ	握り飯:炉[サルケ熾]
繁田	⑩	シボド[サルケ・マキ]	ストーブ[木]＋ハガマ	汁物:シボド[木]＋ナベ　焼物:シボド[木]
繁田	⑬	シボド[サラケ]→ストップ[サラケ]	シボド[木・サラケ]＋ナベ→ストップ[サラケ]	
穂積	⑭	炉[マキ・サルケ]	炉[サラケ・ワラ・マメガラ・カボシ・シカパ]＋ナベ	汁物:炉[サルケ]＋ナベ　焼物:炉[サルケ]
穂積	⑱	炉[シャラケ]		
穂積	⑲	マキストーブ[サルケ・りんご剪定枝]	土間でサンボンアシ[カボシ]＋ナベ→マキストーブ[カボシ]	
穂積	⑳	シボド[サルケ]→(S26)マキストーブ[サルケ]	シボド[不明]→(S26)マキストーブ[サラケ]＋チバガマ	

表記法:設備[燃料]+被加熱具(使用年代)

表2）燃料の変遷に伴う飯炊きの設備と道具の変化　　表記:(年代)設備[燃料]＋被加熱具。矢印は変化を表す

A,燃料

A－1暖房(採暖)　家屋の構造や、燃料の節約という観点から、室全体を暖めることは難しく、実質的には暖房というよりも採暖であった。多くの場合火はシボド(囲炉)でサルケを燃料として焚かれていたようである。昭和20年代後半にマキストーブが導入されたのちも、サルケが燃料として使用されている(繁田①③⑬穂積⑳)。また、サルケに他の燃料(ジャッパ木やりんご剪定枝)を加える場合もみられる。

・自宅のコタツや火鉢での使用／・出作小屋や屋外での使用／・使用しない　今回の聞き取りでは事例がなかった。

A－2炊事　炊事も基本的にシボド(囲炉)でおこなわれたが、採暖の際には用いられない燃料が補助的に用いられる点が注目される。ジャッパ木(繁田②⑬)、カヤ(繁田③④⑧⑨)、ワラ(繁田③⑧⑨穂積⑭)、カボシ(穂積⑭⑲)、マメガラやシカパ(穂積⑭)など、多様な燃料が併用された。これは炊飯に必要な短時間の強い火力を得るための操作であると考えられる。しかしながらサルケだけで炊飯をおこなった事例(繁田①⑤⑧穂積⑳)(繁田⑥※穂積での経験)も相当みられる。ただしこのうち2例は、設備として熱効率のよい「マキストーブ」を用いるようになってからの事例であることに留意が必要である(繁田⑥※穂積での経験、穂積⑳)。冬はサルケのみで、それ以外の期間はワラやカヤを用いたという事例(繁田⑧)は、季節による燃料の使い分けがあったことを示す。設備と組み合わされる炊飯具は、シボドに対してはカギノハナに吊したナベ(繁田①②③④⑤⑨⑬穂積⑭⑮)であり、マキストーブに対してはチバガマ(繁田⑩穂積⑳)という傾向が見られるものの、昭和20年代後半にマキストーブに変わってからもナベを使用したという事例(繁田①)もみられ、これは津軽地方では珍しくない。土間でサンボンアシにナベを載せて炊事をしたという事例(穂積⑲)がある。これは大カマドの前で炉とは別の火を使って調理をする事例で、家の象徴としての囲炉の火が分離されている点が注目される。その意味では調理の実用性に重点がおかれている。大カマドが土間に鎮座していながら調理には用いられないということは(これは一般的な傾向である)、カマドが非日常的で特別なものであるという考え、すなわち機能性よりも象徴性を重んじた旧来の伝統が引き継がれているものと考えられる。

ほかに握り飯をサルケの火で焼くという行為が散見される(繁田①②⑧⑨)。これはヤキメシといって、冷えた飯を加温して食べる方法である。

A－3　火の保持(火種)　A－4　糸煮(カマヤギ)

B,燃料以外の用途　防空壕の入口をサルケでカムフラージュした(繁田⑨)という。

(10)火の操作(管理)

・着火　膝の上でサルケを二つに割り、更に手で4～6分割し、間隔をあけて積み重ねてから着火に取りかかった(繁田⑨)。筆者のこれまでの調べでも、「サルケは火がつきにくい」(繁田②)という人は多い。そこで、着火剤が必要になる。木(ジャッパ木、コッパ)やワラシビ、ヒバの皮などを炉の中に積み重ねたサルケの中や下に挿入して着火(繁田②⑤⑨⑩⑬)した。木をぜいたくに使うことはできず、あくまでツケギとして少量を用いた。また、火種としては熾を利用したが(繁田⑨穂積⑳)、ないときにはツケギ(繁田⑨)やマッチ(繁田⑩)で火を作った。

・維持　サルケに種々の燃料を加えることにより、多様な火を演出し、火力を保持した。用いられたのはカヤ(繁田③④)、ワラ(繁田③)、木の枝(繁田⑧⑪⑬)などである。主な目的は飯炊きであった。サルケ自体の火持ちをよくするため、保管時に積み重ねることによって下層に圧をかけ、堅く締めるという操作がおこなわれた(穂積⑭)。

・始末　就寝前にサルケの熾に灰を被せて火をいけておき(火留め)、翌朝その火を大きくした(繁田⑨)。

(11)副産物

・煙　サルケを焚くと煙が充満した(繁田③⑪)(繁田⑥※穂積での経験)。「時計の文字盤が読めないほど」(繁田①)、「まわりが見えないほど」(繁田⑧)、「家を訪問しても人の姿が見えないほど」(繁田⑨)、「目の前の人が見えないほど」(穂積⑭)の煙だったという。常にいぶっていたが(繁田⑧)、とくに、着火時の煙がひどく(繁田②⑧)、冬でも窓を開けて煙を排出しなければならなかった(繁田⑧)という。その煙は刺激が強かった。「目が痛かった」(繁田③⑤)、「町に住む親戚は耐えられず家に入らなかった」(繁田②)という。そしてこの煙が「メクサレ(眼病)の原因になった」(繁田②⑧)、「トラホームの原因になった」(穂積⑭)と考える人もいる。その一方で、「目は特に悪くならなかった」(繁田⑤)「慣れているので苦にならなかった」(繁田②)、「 まわりも皆同じだから気にならなかった」(繁田④)と語る人もいる。煙を問題化するか否かは、人によりまた時代により異なると考えられる。「煙突がないので(煙が充満して大変だった)」(繁田⑥※穂積での経験)「煙突があったので煙が外に排出されて(煙たくなかった)」(穂積⑲)という説明は、おそらくマキストーブが導入された昭和20年代以降の認識であるが、これは生活改善などの知識の流入が関係していると考えられる。煙をけむたいと感じる感覚自体は「サルケのくべたてや婿逃げる」といった口碑をみれば、昔からあったものと思われるが、それは煙が「問題」であるという主張ではない。確かに「けむたい」のだが、それが「当たり前」であった。更に、問題であるどころか、強烈な煙は「ワラグツやツマゴを燻蒸する」(繁田⑨)、「家屋の材を長持ちさせる」(穂積⑳)、「煙が充満するからこそ暖かい」(繁田②)と考えられていたのである。いわゆる生活改善は、問題の「発見」ではなく、「発明」であるという側面があるということを、これらの証言から確かめることができる。

煤　夏になるとチョコレート色の煤のかたまりが屋根裏から落ちてきた(繁田⑪)[45]。

臭気　「独特のニオイがあり、サルケを焚いている家の子どもたちの服にはニオイが染み付いていた」(繁田⑪)、「体中にサラケのニオイがついて大変だった」(繁田⑬)というように、サルケを焚くと独特のニオイがした。そのニオイは、サルケを焚くことのない他郷の人々にとっては嗅ぎ慣れないニオイであったため、揶揄されることがあった。とくに、繁田集落では岩木川をはさんで東側にある金木(かなぎ:五所川原市金木町)でそのような経験をしたと語る人が多い。金木ではマキを焚く人が多かったからである。「(金木などの)町で『サルケカマリがする』と笑われた」(繁田①)、「ニオイが強烈で、金木の中学で『サルケカマリする』『そばさ来るな』と言われた。『西に行けばサルケカマリする』『どこの人かわかる』と揶揄された」(繁田②)、「金木方面で『サルケカマリする』と揶揄された」(繁田⑧)、「金木の中学に通っていたころ『サルケくさい』と言われた」(繁田⑨)という。いっぽう、地域の人びと自身のなかにも「独特のニオイがした」(繁田⑪)、「若い頃は気になった」(繁田⑬)という人がいる。生活のニオイが意識化(自覚)された経緯には、上記のような他郷の人々(とくに川向かいの「山ドコ」の町や村)との関わりがあったと考えられる。「金木の子どもたちは木の『よい』ニオイがしていて、生活が『上』だと感じた」(繁田⑨)という証言からは、燃料の序列(サルケよりも薪炭がよい、など)や、住む町や村の序列(繁田のムラより金木のマチのほうが大きい、など)が、サルケのニオイは「よくない」ニオイである、マキのニオイのほうが「よい」という意識につながっていたことが見て取れる。しかし、「小学校のころに、祖父がサルケの熾火で握り飯を焼いてくれたり、風邪をひくとカユを炊いてくれたりした。そのような思い出とともにサルケの独特のニオイが忘れられない。サルケのニオイは家族みんなのニオイ、家のニオイである。」(繁田①)というように、そのニオイは原野のただなかに生きるひとびとにとって、先祖から受け継がれてきた生活のシンボルであり、あかしでもあった。

D.灰　県内の他地域では灰について多用な用途が聞かれたが、今回の聞き取りでは少なかった。「肥料にした」(繁田②)という証言が1例あるのみで、「田に撒いたり屋敷の周辺に捨てたりした」「用途はない」(繁田④⑤⑨穂積⑭)という証言のほうが多かった。

(12)補遺(周辺事象)

カヤ　サルケの採取は自給目的であるのに対して、カヤは交換目的で採取された。前者は田地改良の副産物として米作りの過程に取り込まれているいっぽう、後者は米作から独立した収入源としての意味を持っていた。「サルケを切った場所でカヤを採った。カヤは現金収入になった」(繁田①)という。米作単作が持つリスクを回避する意味があったと考えられる。一方で、サルケを交換しない理由は、サルケには「マキ」や「カヤ」のような商品価値がないということではなく、基本的な生活必需品は現物として保管することを優先したためであると思われる。余剰分も翌年以降の使用に備えて保管した。

サルケの保管　昭和33年(佐々木直亮氏撮影)

シクサ　サルケを採取するヤチは、馬のシクサを採取する場所でもあり、シクサを採ったあとで、サルケを採った（繁田⑨）。シクサを刈らせてもらいに蒔田や金木などから来ることもあった。地域の産物による互助的・互恵的関係がむすばれていた。

ヤチ　サルケを採取するヤチやカヤ原に飛行機が墜落したという思い出話を複数の方から聞いた（繁田①⑨）。終戦前のころ、日本軍の飛行機が墜落したのだという。青森空襲の様子を当地（繁田）から見たという話も聞いた。中山山地をこえた向こうの空が赤く染まっていたという。この方は戦後、アメリカ人の鼻が高いという話を聞き、茂みの中で駐留軍のジープを待ち伏せしていたところ、転んで鼻を打ち鼻血を出したというエピソードも語ってくれた（繁田⑨）。[46]

温泉　当地方では非火山性の温泉が長らく親しまれてきた。昭和9年生まれの繁田の女性は、週に三度のユッコ（温泉）で知り合いと過ごすことが唯一の楽しみである。本家の二男と結婚し、本家に10年間仕えたときは大変な苦労をした。大家族のため、風呂に入る番もまわってこなかった。繁田に家を建ててからもお盆休みなく農作業や出荷し、孫の世話をしながらの田の草取りや、夕飯の支度などに追われ、息をつく暇もなかったという。そのような生活の苦労もあり、ゆっくり温泉に入って過ごすことが今は楽しい（繁田⑬）。

カジ　サルケを掘る道具を含め、農具全般の需要から、鍛冶屋は相当繁盛したものだという。「カジババネゴト」ということわざがあった。鍛冶屋のおかみは秋になると一気にお金が入ってくるので寝て暮らせるという（繁田⑭）。

盗掘　湿原には採掘の権利が設定されていたが、無断でサルケを採掘する人がいた。津軽地方における具体的事例は、拙稿（2018）に記したが、今回の聞き取りではあらたに、盗掘の事実を記録する物証を得た（繁田集落）。サルケを二度と盗まないことを誓約し、再犯した場合の代償について定めた明治30年代の証文である。紙数の関係から、稿をあらためて報告したい。

知識　「サルケの水平方向に切り込みを入れなくても手で外れる」「目を入れる」（繁田①⑧）という知識は、泥炭の異方性についての知識である［3(5)E参照］。「サルケが強い」（繁田⑨⑩穂積⑰⑳㉑など）という泥炭量の多少についての知識は、場所により層厚が異なることにつての知識にもとづく［3(3)B参照］。降雨を気にせず屋外、たとえば「田のクロに積む」（繁田②⑤⑩⑬）理由は、泥炭の乾燥にともなう難可逆性・不可逆性についての知識に関わる［(6)参照］。「ツチマジャリ」「ネンバマジャリ」のサルケ」（繁田②④⑨⑫穂積⑭）、「堅いサルケ」「柔らかいサルケ」（繁田②⑧穂積⑭）などの質的分類は、採取場所による構成植物の違いや、田地での排水履歴の有無が泥炭の質的変化をもたらすことについての知識に関連している［3(3)C参照］。「排水のよい田のサルケは堅く締まってよい」という認識（繁田⑧）は、排水によって（間隙比と透水係数が小さくなり）強度が増す事実に関連する［3(3)C参照］。庶民はこのような知識を経験的に獲得し、理に適った方法でサルケを利用していた。その経験と知識は、世代を超えて共有されてきた。

5,結論と課題

(1)採取の主体、方法

従来の報告では、男性が主体として描かれ、女性や子どもの参与について言及されることがなかった。その理由は、男性が中心となる場合が多い「サルケを切り取る作業」にのみ焦点をあわせ、その他の一連の作業工程全体を顧みることがなかったことにある。サルケの採取は、サルケを切り取る作業だけで成り立つものではない。切り取ったものを持ち上げる作業、受けとる作業、移動させる作業、置く作業などからなる。それらの作業には女性や子どもの積極的な参与があった。また、家族で採取をおこなう場合もあれば、小作人を使用する場合もあった。

つがる市稲垣町繁田（しげた）では、サルケ採取に特化した長大なカマでサルケの底面を切ったという。筆者は前回の報告（拙稿2018）で、カマの利用は同市木造柴田（しばた）に特異的にみられる慣習である可能性を示唆したが、他集落でも同様の道具の使用と用法があったことになる。サルケ切りにおけるカマの利用については、従来の報告では取り上げられていないので、あらためて報告したい。［(5)D,(6)参照］

(2)利用の多様性

従来の報告では、サルケについて説明する場合、①「暖房のために」に、②「冬に用いられる」、③「燃料である」とするものが多い[47]。このような説明は誤解を生じさせるおそれがある。①の定義は、サルケ（泥炭）は「暖房用燃料」であるという、誰もが想像しうる常識的なイメージだけを増幅させ、炊飯を含む煮炊きや風呂焚きなど、サルケの燃料としての多様なありかたをないがしろにする説明である。②の定義は、サルケは冬季に限って用いられるものではなく、一年を通じて飯炊きをはじめとする調理にも用いられたという事実を見落としている説明である。③の定義は、サルケの用途が燃料に限定されない多様性を持つことについての注意を欠いた説明である。サルケの用途は世界的にみれば非常に多彩であり、麦芽の乾燥、敷きわら、泥炭紙、泥炭ローソク、皮なめし、窯業、アルコールの抽出、充填剤、浄化剤、脱臭剤、建築材料、保水剤、泥炭浴などの用法が知られる[48]。防空壕の入口を塞ぐ材料として用いられた、という今回の聞き取りで得られた用例は特殊な事例であるが、筆者による従前の調査では、家屋の保温、サルケ灰による融雪、灰肥、あくぬきなど、日常生活においても、サルケには多様な利用法があったことがわかっている。調査を進めれば、更なる多彩な直接・間接的利用の実態が見えてくるだろう。［(9)A2,B,(11)E参照］

(3)利用の動機

従来の報告では、泥炭(サルケ)が「燃料不足を補うための薪の代用品である」と説く[49]。すなわち、①「燃料が足りないから利用した」という動機、②「燃料にするために採取した」という目的、③「薪の代用」として序列化する意識を強調しているが、この意味付けは妥当だろうか。

まず、①と②についての問題点を指摘する。今回の調査では、採掘の第一の目的に燃料の確保を掲げる事例は3例であるのに対し、開田や田地の改良を主たる目的として掲げる例のほうが多く、7例あった。この場合、田地の改良とは、湿地や既成田からサルケを採掘する際に、他地域から運搬した火山灰土や岩木川の砂などを客土して泥炭土壌を改善することである。開田や田地の改良に重きを置く傾向は、筆者の調査では下北地方で確認された。ほかに、田面を低くすることで灌漑不良の改善につなげる場合や、表層のサルケを焼いてしまうことで灰肥とするなどの動機が確認されている[50]。サルケの採取にはさまざまな動機が併存しており、単に燃料不足解消という視点からのみ説明することは妥当でない。目的や動機の重点が、燃料採取ではなくむしろ土地改良に置かれる場合もあることに注目したい[51]。

次に、③について、すなわちサルケの評価に関する問題点を指摘する。津軽地方において過去にサルケを盛んに利用した地域は、岩木川下流域の平野部を中心とした地域であったと考えることができる。しかし、これまでの筆者の報告(拙稿2016,2017)をふまえるならば、村山や持ち山の木や柴を利用できる地域や、リンゴの選定枝や流木を利用できる地域であっても、程度の強弱はあれサルケを使用する場合があり、その範囲は予想以上に広いといえる[52]。また、岩木川下流域の平野部は穀菽農業がさかんであり、稲ワラやマメガラなど、火持ちはよくないが強い火力を生み出すことができる燃料に恵まれていながら、飯炊きにサルケを利用していたという事例も意外に多い。使用されていた時代についても、薪や油の入手が往時にくらべ容易になった高度成長期においてすら、未だストーブの燃料として利用していたという事例が複数ある。これらの事例から言えることは、燃料の選択肢が豊富な時代や地域でも、サルケが併用もしくは優先して使用されたということであり、すなわち、他の燃料にないサルケの特性(メリット)が尊ばれていたという事実を示すものである。サルケは固形燃料として保管が便利であるほか、分割が容易である。穏やかに持続する火の特性もまた、用途によっては利点である。そして何より、入手に関するメリットは大きい。山へ行って柴や杉葉を拾ったり、共同で木伐りをおこない薪を分配したり、薪売りから購入したりしなくても、足下に「宝の山」があるのである。弘法大師ゆかりの焚き物であるという伝説[53]が津軽地方に語り伝えられていたのは、この地域の人びとがサルケを誇りに思っていた心意のあらわれではないか。筆者が聞き取りをおこなった際の、例えば「(金木など山際の村は)サルケがないから焚かないのだ」(繁田⑧)という話者のかたり口からも、焚き物がないから仕方なく利用するという消極的な意識ではなく、サルケという便利なものが近くにあるから利用するという積極性や肯定感が窺われた。そのような意味で、サルケをネガティブに序列化し、薪や木炭に劣る代用品であるとする評価と説明は、地域的あるいは時代的に外部にある者のまなざしにもとづくある種の偏った見方であり、そこに暮らす人びとの意識を必ずしも反映したものでない可能性があることに留意したい。[3(2),(5)A参照]

(4)周辺事象

サルケの採取や利用にともなって生じる事象は見落とされやすい。これまでの調査結果(拙稿2015-2018)をもふまえて以下に要点を記す。

①遊び　サルケの採掘跡は子どもたちの遊び場であり、採掘跡に生息するフナやエビ、ナマズなどの採取は遊びを兼ねていた。それらを調理する火はまさにサルケの火であった。広大なヤチ(湿原)の向こうに、日本軍の飛行機が墜落し、その現場を見に行こうとしたという子どもたちの行動(繁田①⑨)もまた、ヤチを舞台とした一種のあそびの延長にあった。「目の前に見えているのに、走っても走ってもたどりつけなかった」という少年の記憶は、感受性や好奇心の強さがもたらす心理的な距離の近さと、現実の距離の遠さとの矛盾からみちびき出された印象であった。身近にありながら無限の広がりをもち、日常と非日常をつなぐ、近くて遠い「ヤチ」の心象風景が形成された[(12)]。

②煙　サルケの発する強烈な煙が、草屋根や柱の結びナワなどの腐植を防ぎ、ワラ製品の燻蒸に役立った[(11)A]。垂れるほどに家屋の随所にまとわりつく煤からは、膏薬が作られ、治療に用いられた。その一方で、猛烈な煙により眼病を患ったと考える人が多く[(11)A]、さまざまな行為を通じて治癒を祈願する民間信仰にもつながった。

ただし、煙を病気の原因であると捉える思考、すなわち煙の「問題化」は、外部からの知識の流入(指導、啓蒙)によるものであると考えられる。「サルケのくべたてや婿逃げる」といった古い口碑の存在は、不快さという感覚や生理的反応があったことを示しているが、煙が解決すべき問題であるという認識を示してはいない。『津軽口碑集』の著者が、貧しい民家の懸けムシロをめくり上げて屋内に入ったとき、住人の存在も分からないほどに充満した煙は、確かに外部の者にとっては耐えがたい問題であったが、住人はいたって平常であった。問題であるどころか、生活者にとって煙には上述のようなさまざまな利益があり、「煙が満ちるからこそ温かい」とまで考えられていた(繁田②)。眼病(メクサレ)についても、祈願はあったが、その祈りはあくまで原因の除去ではなく病状快復を願うものであり、往時の農村の生活者一般が、原因(煙)と結果(眼病)を結びつける思考を有していたわけではない。その思考は、たとえば戦後であれば、炉を囲む家庭とストーブを用いる家庭では眼病の罹患率に大きな

差がある[54]といった生活改善の諸活動によって普及された知識等によるものであると考えられる。当の生活者にとって、煙はむしろ有り難いものでもあった。[(11)A]。

③ニオイ　サルケ特有のニオイは、この地域で暮らしを紡いできた人びとの歴史と記憶に深く繋がっている。懐かしい村、家、家族の生活のあかしとして肯定的に語られる。いっぽう、劣等感を象徴するものとして否定的に語られる場合もある。これは、サルケ特有のニオイについて外部の者から揶揄された経験にもとづいている場合が多い。ムラの人びと自身のサルケに寄せる心情とは裏腹の、知識階級やマチの人びとの一方的な価値観（偏見）を裏返した言説であると考えられる。[(11)C]

以上のように、サルケは、サルケの採取や利用に関連する行為や行為の結果等を通じて、この地域における人びとの暮らしに多様なかたちで結びついている。[3(5)A,(11)A－D,(12)]

(5)他地域との比較

県内における庶民の泥炭利用については、本稿で取り上げた集落を含む、津軽地方の岩木川下流域がよく知られている（本稿および拙稿2015,2018）。しかし筆者の調べにより、下北地方（むつ低地）や上北地方（沼崎低地）でも、サルケ（シキボ）が盛んに利用されていたことが明らかになっている（拙稿2016,2017）。さらに県内外の事例を調べ、比較検討することは今後の課題である。

謝辞

対象地域にお住まいの多くの方々のご協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

注）

2)青森県津軽地方および下北地方では「サルケ」「サラケ」、上北地方では「シクボ」「シゴボ」「シクボ」などと呼ばれる。本稿のタイトルや地の文では、基本的に「サルケ」を用いる。ただし聞き取りの記録(3 調査結果)については、会話文中以外でも話者の発音を尊重した表記とする。

3)「泥炭」について『新版地学事典』(地学団体研究会 新版地学事典編集委員会編,平凡社,1996)では「湖沼,河川の後背湿地など排水不良地に生育する草本・樹木類およびコケ類などの遺体が,還元状態で堆積した未分解の有機物質」と定義する。泥炭のなかでとくに草本類を主体とするもの(草本泥炭)を「草炭」という場合がある。

4)拙稿2015「青森県岩木川下流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2015『青森県立郷土館研究紀要』第39号,pp.63-102)

拙稿2016「青森県下北地方におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2016『青森県立郷土館研究紀要』第40号,pp.89-148)

拙稿2017「青森県上北地方におけるシギボ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館2017『青森県立郷土館研究紀要』第41号,pp.89-162)

拙稿2018「青森県岩木川下流域におけるサルケ(泥炭)の利用(2)」(青森県立郷土館2018『青森県立郷土館研究紀要』第42号,pp.95-162)

5)五所川原市、つがる市、中泊町、森田村、鰺ヶ沢町（平成の大合併前の旧9市町村域）、33集落、43名を対象とした。

6)近現代に著された書物では、津軽地方のサルケについて次のように説明されている(第三者による「客観的」な解釈が記される部分を抜粋した。傍線はすべて筆者が付加したものである)。「津軽地方の岩木川下流地帯では山林が少なく薪が手に入りにくく、サルケと呼ばれる泥炭を燃料とした」(青森県史編さん通史部会2018『青森県史通史編3 近現代 民俗』青森県,p.711)、「岩木川下流域には湿地帯が多く、……この地方は山がないため燃料である薪を入手するのが困難であった。それで、このサルケを掘り出して燃料とした」「岩木川下流域の集落では、夏に湿地からサルケ(泥炭)を掘り起こし、これを乾燥させて冬の暖房用の燃料とする」「この周辺地域(筆者注:つがる市車力)では冬にはダイドコロ(居間)のシボド(囲炉裏)で、暖房用の燃料としてサルケ(泥炭)をたいた」(以上青森県史編さん民俗部会2014『青森県史 民俗編 資料 津軽』,pp.32,171,188)、「近くに山がない津軽平野の農村ではどこでも薪に苦労して、サルケという泥炭を掘り夏の間に乾燥させて燃料にしていた」(須藤功編2010『宮本常一とあるいた昭和の日本14東北1』西山昭宣「津軽十三湖」p.204)、「冬の暖房用の燃料にはサルケを用いる」(青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編2008『青森県史叢書 岩木川流域の民俗』p.92)、「薪が不足しがちなこの地区の家では、冬、暖房用にサルケ(人によってはサラケという)を焚いた。……簡単に焚き物が手に入らないこの地区の人たちにとっては、唯一の燃料であった。」(青森県立郷土館1998『青森県立郷土館調査報告第42集・民俗-21「再賀の民俗」調査報告書』p.61)、「薪のとれる山が少ないこともあって、家で燃やす燃料にサルケ(泥炭)を使った。」(五所川原市編1993『五所川原市史 史料編Ⅰ』p.459)、「燃料は『サルケ』と呼ばれる泥炭が主で、マキといっしょに燃やした」(弘前大学民俗研究部1984『木造町民俗調査報告書 こまおどり』p.27)、「『さるけ』は林地の少ないこの地方唯一の囲炉裏の燃料である」(楠本正康1981『こやしと便所の生活史－自然とのかかわりで生きてきた日本民族』ドメス出版,p.139)、「津軽ではこの泥炭をサルケと呼んで、山が遠く薪の乏しい新田地方の大切な燃料であった」「乾燥したサルケを冬の間炉で薪にまぜて燃やすのである」(森山泰太郎1972『日本の民俗 青森』第一法規出版p.59)、「平野の真中の村でたき物に苦労したのと、耕土の改良を兼ねて掘り取るのである。」(宮本常一,原口虎雄,谷川健一編1970『日本庶民生活史料集成』第十巻農山漁民生活「奥民図彙解説」p.253)、(サルケやネッコやヤチマグソなどの泥炭を焚くのは)「人が薪炭の缺乏にどれだけまで堪へるかといふ試みのやうなもので、是だゞ一種では住み続けられもせず、又さふいふ生活方式もまだ固定して居ない」(柳田國男1944「火の昔」實業之日本社:柳田國男1970『定本柳田國男集』第二十一巻,筑摩書房,p.268)、「この猿毛を燃料に採取することは、……他の燃料の得にくい地方である。」(柳田國男1916「燃ゆる土」:初出『郷土研究』第四巻第五号、大正五年八月一日、郷土研究社:柳田國男2000『柳田國男全集』第二十五巻,筑摩書房,p.104)、「此村々山遠く薪炭に乏ければ菅茅芦荻の類を以て薪に替ひ又泥炭を采て炊爨の用となす」(岸俊武1876『新撰陸奥国誌』巻第四十一:青森県文化財保護協会1965みちのく双書第十七集『新撰陸奥国誌』第三巻,p.156)、「大川に沿ふ村々は薪炭乏しく細民はサルケを以て薪に替ふ」岸俊武1876『新撰陸奥国誌』巻第三十四:青森県文化財保護協会1965みちのく双書第十七集『新撰陸奥国誌』第三巻,p.35)

引用注7)以降は168ページへ続く

表3)　データ一覧

No.		集落	性	生年	齢	来歴	呼称	使用年代	定義/分布/質	入手	目的	時期	場所	主体	採取法	サイズ	道具
1	A	繁田	男	昭和7年（1932）	86	当地で生まれ育つ	サルケ	S30年前後まで	サルケは「草の根」である。非常に燃えやすい。	自家消費用に採取	燃料の確保(自給)		太田光の自家所有のヤチ	父親が主体で、自身も手伝った	垂直の切り込みを入れるためにテンチキで切れ目を入れる。熟練を要する。表層を手で剥がし捨てる。カンビチャに載せて引き上げることも。道具を使うと水に入らずに済む。相当深く二段分掘った(「二重あげ」)。		(垂直)テンチキ(水平)カンビチャ
2	B	繁田	男	昭和9年（1934）	84	当地で生まれ育つ	サルケ	S22-23年頃まで	サルケは「草の根」が固まったもの。堅いものは火持ちがよい。「土まじゃり」は燃えにくい。	自家消費用に採取。売買なし	燃料の確保 田地の開発、堰留め	田植え後の夏	自宅から1kmの自家所有の田	父親が主体で、自身も手伝った	表土を除去し、糸を張る。テンズキで糸沿いに縦横垂直に切り込む。表土は手で剥がす。サルケ専用カマで底面を切り取りる。浮力を利用して持ち上げる。トクナガ着用。切れ目を入れる作業にはタヂを用いることも。	W40-50 D40-50 H30 重さ20kg	(垂直)テンズキ(水平)カマ タヂ
3	C	繁田	男	昭和21年（1946）	72	当地で生まれ育つ	サルケ	S37-38年頃まで	サルケはヨシなどの植物が枯れた「草の根」である。神田橋の南方に分布。	自家消費用に採取	主・田地の開発 従・燃料の確保	秋遅くから冬	湿地から(その湿地を田にするため)	父親が主体	刃に柄のついた道具でタテヨコ25×30cmに切り込み。クワのような別の道具で厚さ10cm程度に水平に切り込み、引き上げる。	W30 D25 H10	(垂直)刃+柄の道具(水平)クワ様道具
4	D	繁田	男	昭和8年（1933）	85	当地で生まれ育つ	サルケ	S31-32年頃まで	サルケは「草の根」である。品種によってよいものと悪いものがあり、土混じりのものがよい。	自家消費用に採取		田の仕事が始まる前	自家所有の田から		タヅを使った。タテヨコ30-40cmほどのサイズで、冬に焚くぶんだけ採取し、山などから土を持ってきて客土した。	W30-40 D30-40 H30	タヅ
5	E	繁田	男	昭和6年（1931）	87	当地で生まれ育つ	サルケ	S31-32年頃まで	よいサルケとは、土が混ざらないサルケばかりのもの。	自家消費用に採取	田地の開発 兼 燃料	シロカキの前	自家所有の田から		タヅなど用い表土を除去。右記サイズで1段分を採取。採取する量は、昔の田の1枚のサイズの1/2-1/3ほど。一度あげた土を返してもぬかるので、岩木川から馬で土を運び客土する。	W40弱 D30弱 H30	タヅ 特別な道具
6	F	繁田	女	昭和18年（1943）	75	穂積田生まれ S37に当地へ	サラケ サルケ	S37年に穂積で焚く/当地では焚かず	サルケとは、「根っこ」であり、田にある。	自家消費用に採取			田から	親。F氏は手伝わず見ていた			
7	G	繁田	男	昭和33年（1958）	60	当地で生まれ育つ	サルケ	S39年より前まで焚いた	サルケとは、暖房用の燃料であり、「ストーブ代わり」である＝「代用品」である)。	自家消費用に採取	暖房用燃料用		この近辺から	父親。G氏は手伝ったことはない			
8	H	繁田	男	昭和10年（1935）	83	当地で生まれ育つ	サルケ	S25年ころには使用。その後マキストーブ	サルケは「草の根」である。堅いのが良く、柔らかいのは悪い。排水のよい田のサルケは堅い。	自家消費用に採取		ナワシロ後、田植え前		父親。H氏は運搬を手伝う	クワのような道具で地面に溝を入れ、表土を別の道具で除去。すでに採取した低い場所に落とす。サルケの層に「目」を入れ右記サイズに切り込む。底面を切らなくても、カパカパと採れた。	W30-40 D15 H30-40	(垂直)刃+柄の道具(表土)クワ様道具
9	I	繁田	男	昭和10年（1935）	83	当地で生まれ育つ	サルケ	S19-21年ころには使用	サルケがちの場所を「サルケが強い」という。土混じりで火持ちのよいものが良質。	本家の土地から自家・本家用採取		田の草とり後、7-8月頃、お盆前ころ	繁田から約300mのヤチ	本家の兄弟、母親も採掘を手伝う	タヂで、縦長に3本・横に5本の切り込みを入れる。サルケ専用のクワで表土を除去。表土下のサルケを2段掘り。サルケ使用の末期にはフォークで持ち上げ。草履、ワラグツ履き、すね当て着用。	W30 D30 H15	(垂直)タヂ(表土)専用クワ
10	J	繁田	女	昭和14年（1939）	79	母/中里町生まれ 子/当地生まれ	サルケ	S35年当地で使用/嫁ぎ先は使用せず	サルケとは「草の根」である。昔の草などが沈殿して固まったもの。	田から自家用に採取	田地の改良 燃料	4月末-5月ころ、田植えの前	田	サルケを切る作業は男性	田の土を一旦寄せて、田の下から30cm×20cm厚さ15cmほどの四角形に2段分切った。	W30 D20 H15	スコップのような、柄のついた道具
11	K		男	昭和36年（1961）	57												
12	L	繁田	男	昭和11年（1936）	82	繁蒔生まれS40代に当地へ	サルケ	明治生まれでなければわからない	繁蒔ではサルケを使用しており、場所により質が異なる。ネンバマジャリのサルケは悪い。	田から採取	田地の改良	田植え前	田				
13	M	繁田	女	昭和9年（1934）	84	牛潟で生れ S29に繁蒔へ S39に	サラケ	繁蒔/S29使用・繁田/S39以降も盛ん	サラケは「ヤヅのツヅ」である。ヤヅの表面を取り除いた下にサラケがある。	繁田のヤヅから自家用に採取	燃料？	田植え前の春	湿地から	切る作業:男性主、運搬:女性も	タテヨコ1尺四方、厚さ2寸ほどに切り取る。	W1尺 D1尺 H2寸	
14	N	穂積	男	大正14年（1925）	93	当地で生まれ育つ	サルケ	S18には使用S23年家では使用せず	サルケは草の根が蓄積したもの。良:木の根を含み良く燃える。悪:土が多く重い。	ヤチから小作人に採取させた	主:田地の開発 従:燃料	田植え後 秋-冬に採取	「サルケヤチ」「カヤヤチ」から	小作人を使用	表土を除去し、等間隔で縦横等間隔でキズを入れる。別の道具で水平に切り込み、引き上げる。田地にすることが目的なので、深く掘らず、1段にとどめた。	W50 D15-30 H30-50	垂直:刃+柄の道具 水平:刃+柄の道具
15	O	穂積	女	昭和24年（1949）	69	蟹田で生まれ S48に当地へ	サルケ	S48年には使用されていなかった	田やヤチの中から取りだした「根」を干したもの(嫁いだ当時は「サルケ」を知らなかった)。				「サルケ田」から採取				
16	P	穂積	女	昭和17年（1942）	76	豊島で生まれ S38に当地へ	サルケ	豊島/S20代に使用			燃料						
17	Q	穂積	男	昭和30年（1955）	63	当地で生まれ育つ	サルケ	S30代に使用	当地より北方にある田にある。	田から			田	手伝った経験はない	田の下から四角に切り出した。		
18	R	穂積	女	昭和10年（1935）	83	当地で生まれ育つ	シャラケ	S10代～30代ころに使用					沼館のヤチから	手伝った経験はない			
19	S	穂積	女	昭和15年（1940）	78	市浦で生まれ S32-33に当地へ	サルケ	S32-33ころ使用 自宅はマキストーブ	馬の糞のような乾燥した四角いもの。	田から自家用に採取	田地の改良 燃料の確保		ゴミ焼場付近の幹線道路の北の田		田の土を掘り返し、四角に切り出す。掘った場所に土を戻す。戻さない場合は深いぬかるみの穴になり「サルケ穴」「サルカィ穴」と称した。	乾燥時 W20 D30 H10弱	
20	T	穂積	男	昭和16年（1941）	77	妻/木造生れ S41鶴見里へ	サルケ	鶴見里/S26頃使用 穂積/S46石油ST	穂積周辺は田としての一等地でありサルケはあまりない。繁田繁蒔方面に分布。	ヤチから自家用に採取	燃料の確保		繁蒔繁田方面の「サルケヤヂ」		「サルケヤヂ」の「クサ」の下を少し掘ると表土(よい土)が現れる。その下を道具で垂直に切り、掘り跡には土を入れた。	乾燥時 W20 D20 H10	「長い木の棒に広い刃のついたもの」
21	U		女	昭和22年（1947）	71												

乾燥	運搬	保管	採暖	炊事	着火・維持・始末	煙・ニオイ・灰	その他
フタマギ（二段重ね）にし、マギ返す。マギ返しはA氏がおこなう。	自宅へ背負って運搬。A氏も手伝う。ズボンからサルケの粉が入り全身ゴミだらけ。		炉（サルケ） →S29マギストーブ（サルケ）	かゆ：炉+カギノハナ+ナベ（サルケ） かゆ：マギストーブ+ナベ（サルケ） 握飯：炉（サルケ熾）		時計の文字盤が読めないほどの煙。町では「サルケカマリ」がすると笑われる。サルケのニオイは忘れられない。我が家のニオイである。	・子どものころ祖父がサルケの熾火で握り飯を焼いてくれたり、風邪をひくとカユを炊いてくれたりした。サルケのニオイは家族みんなのニオイ、家のニオイであり忘れられない。 ・サルケを切った場所でカヤを採った。カヤは現金収入になった。
田のクロに5-6段のレンガ積み。マグナオス。子どもや若者の仕事。	お盆-9月稲刈り前ソイコで2-3マル運搬。フトマルギ5枚を馬でカナグルマにのせる。	小屋に保管	イロリ（サルケ+ジャッパ木）	煮物・焼物：炉+カギノハナ+ナベ（サルケ+雑木）焼物：炉+串（サルケ+雑木）握飯：炉（サルケ熾）	サルケは火がつきにくいので、共同購入した山から拾って来たジャッパ木を挿入して着火した。	煙とニオイが充満し、大変だった。独特のニオイがあったが、問題であると考えられることはなかった。	・往時の農具を多数保管している。イビ（エビ）、スコップ改造イビ、イビカ、サンボンカ、タヂ（3本）、トビなど。
風通しがよくなるように互い違いに三角形に重ねて乾燥させた。	5個一束を馬で運搬。C氏も手伝う。		イロリ（サルケ） ストーブ（サルケ）	炊飯：イロリ+ツルベ+ナベ（サルケ、カヤ、ワラ）	サルケとカヤ、ワラなどを併用し、燃料の使い分けによってさまざまな火を演出した。	煙とニオイが充満し、大変だった。独特のニオイがあったが、問題であると考えられることはなかった。	
屋外に置き、冬に間に合うように乾燥。納屋に積んで更に乾燥。	縄で束ね背負って農道まで運搬。馬やリヤカーで屋敷まで運搬。	屋敷のそばの広い場所に積む	シボド（サルケ）	炊飯：炉（サルケ、カヤ）+カギノハナ+ナベ	火力を必要とする場合には、カヤを用い、燃料を使い分けることでさまざまな火を演出した。	目の痛みがあったが、まわりもみな同じなので気にしなかった。灰は田に撒いたが、肥料にするという意識はなかった。	
田のクロに互い違いに5-6段積み重ねた。女性もみな手伝った。	稲刈り前に背負って運搬。		シボド（サルケ）	炊飯：炉（サルケ）+カギノハナ+ナベ	コッパを燃やし、サルケの下から着火した。	煙がひどく、目の痛みが激しかった。しかし、目は特に悪くならなかった。灰はそれほどたまることはなく、田や屋敷の周辺に捨てた。	
			シボド（サルケ）	炊飯：ストーブ（カヤ、木） 餅：シボド（サルケ）	シボドにサルケを積み上げて焚いた。	煙突がないので、煙が出て大変だった。	
			マキストーブ（サルケ）		紙などを火種にして着火した（想像）。		・昭和33年生まれの同氏は、幼少期の記憶としておぼろげながらサルケの火に実際にあたった記憶をもつ最後の世代であると思われる。
間隔をあけて5-6段積み重ね、1-2回ひっくり返す。	お盆過ぎにナワで束ね、ショイコで背負い自宅へ。馬も使用。H氏も手伝う。	ムシロ状のものを被せて保管	シボド（サルケ）	炊飯：シボド（サルケ）、夏季（ワラ、ヨシ、カヤ、枝） 握飯、魚、エビ：シボド（サルケ）	夏はサルケを使用せず、ワラ、カヤ、木の枝などを使用し、燃料を使い分けた。	煙が多量に出て、まわりが見えないほどだった。冬期でも着火時には窓をあけて煙を排出した。煙は眼病の原因になった。金木方面で「サルケカマリする」と揶揄された。	・カヤ刈りには柄の長い大きなカマを使用。カヤをつかみ、下から手前に引いて刈る。2回分が一束。 ・国民学校4年のころ、青森が空襲される様子を遠くから見た。空が赤く染まっていた。防空壕の入口をサルケでカムフラージュした。戦後、アメリカ人の高い鼻を見たくて茂みで待ち伏せしていたところ、転んで鼻を打ち鼻血が出た。
間隔をあけて4-5段に積み重ねる。乾燥は1ヶ月かからない。	稲刈り前、遅い人では稲刈り後に運搬。ワラで束ね、馬で自宅へ。	家裏に積みカヤやワラを被せ保管		炊飯：炉+カギノハナ+ナベ（サルケ、ワラ、カヤ） 握飯：炉（サルケの熾）	膝の上で割り、手で4-6分割して積み重ね、熾を利用して着火。熾に灰を被せて火種を保持した。	煙でワラグツやツマゴを燻蒸。ムシロをあげて家を訪問しても人が見えないほどの煙。子どものころ「サルケくさい」と言われた。川向かいの町は木のニオイがして生活が上だと感じた。	
田のクロに間隔をあけて4-5段に積み重ねて乾燥させた。	乾燥後、自宅へ運搬した。	小屋に保管	シボド（サルケ、マキ）	炊飯：ストーフ+ハガマ（木） 汁物：シボド+ナベ（木） 焼物：シボド（木）	サルケと木を併用し、マッチで着火。サルケは乾燥しているので、着火は容易だった。	煙が多量にあがった。夏になるとチョコレート色の煤のかたまりが屋根裏から落ちてきた。独特のニオイがあり、サルケを焚いている家の子どもたちの服にはニオイが染み付いていた。	・同氏が生まれた豊岡（中泊町）ではサルケを使用せず。サルケを使用するのは主に岩木川の土手近くの集落だと考えている。 ・繁田集落は繁苞集落からの分家が多いという。
				豊岡 炊飯：ストーフ+ハガマ（木） 汁物：ストーフ+ナベ（木）			・本家に10年仕えた。大家族のために風呂に入る番もまわってこなかった。繁田に家を建ててからも農作業や家事に追われ、息をつく暇もなかった。しかし、殆ど病気をしたことがなく、健康である。いまは週に三度のユッコ（温泉）で過ごすの
田のクロに積み重ねて乾燥させ、ひっくり返す。もっぱら男性。	自家製のナワで10枚一束とし、ソイコで自宅へ運搬。	小屋に積み重ね保管	シボド（サラケ） ストップ（サラケ）	炊飯：シボド+カギ+ナベ（カヤ、木、サラケ） 炊飯：ストップ（サラケ） ※夏は使用せず	シボドで、2-3本の少量の木の上にサラケをのせて着火した。	常時いぶっていた。体中にサラケのニオイがついて大変だったが、どうしようもなかった。若い頃は気になった。	
間隔をあけず5-6段に積み重ねる。	夏-秋ころ乾燥したところで5-6枚一束をハシゴ（ショイコ）で運搬。	屋外や小屋に積み保管	炉（マキ、サルケ） サルケの使用割合は低い	炊飯：炉（サルケ、ワラ、マメガラ、カボシ、シカバ） 汁物：炉+カギノハナ+ナベ（サルケ）	調理の目的により燃料を使い分け。火持ちをよくするために保管時に圧をかけた。	目の前の人が見えないほど多くの煙が出た。トラホームの原因になったと考えている。ニオイもある。煤の黒い滴が天井から落ちる。灰の用途はなかった。	・鍛冶屋は繁盛した。「カジババネゴト」ということわざがあった。鍛冶屋のおかみは秋になると一気にお金が入ってくるので寝て暮らせるという揶揄。
				焼物：炉（サルケ）			
			（用途については語られなかった）				
乾燥させている様子を見たが詳細は不明。			（燃やしたというが、何のために燃やしたかは語られなかった）				・昭和30年代当時はマキや石炭が使われており、貧しい農家の二男三男の分家でサルケをよく使用していたと語る
	採取したのち、家に運搬し保管。	採取したのち、家に運搬し保管	炉（シャラケ）	炊飯：（祖母がおこなっていたので不明）		煙が出たが、詳しいことは答えたくない。	・昔は「どこの家でも焚いていた」と語る
堀の間の拾い場所に、作業に支障をきたさない場所に積んだ。		サルケを使用しなくなり全て廃棄	マキストーブ（サルケ、りんご剪定枝）	炊飯：マキストーブ（カボシ） 炊飯：サンボンアシ+ナベ+トタン囲い（カボシ） 場所：土間のカマドの前		マキストーブに煙突が付属していたので、煙は外へ排出された。	
自宅近くの路上の端の風当たりのよい場所に交互に積んで乾燥。	採取後に、家の付近の路上まで運搬した（運搬後に乾燥、というパターン）。		シボド（サルケ） →S26頃マキストーブ（サルケ）	炊飯：（シボド、不明） 炊飯：マキストーブ+チバガマ（サルケ）	火種をつくり、その上にサルケを重ねて着火した	シボドの時代は煙やニオイが家屋の材を長持ちさせた。マキストーブの時代になってからは屋外に煙を排出するようになった。	・ご夫婦でタマネギの植え付けの準備中

165ページより続く

7)拙稿2015(津軽地方)43名、2016(下北地方)36名、2017(上北地方)61名、2018(津軽地方)26名、2019(津軽地方)21名、合計187名。

8)2016年11月28日の聞き取り（文中Ａ氏、繁田①）のみ、当地域への公務の折に伺った内容である。

9)青森県2017『青森県史　資料編　考古　Ⅰ』, p. 44

10)菊池利夫1958『新田開発』、土淵史編纂委員会編1958『青森県土淵史』などを参照。17世紀なかばころはまだ「桑野木田よりも下もは芦萱茂り蒲地にして十三迄は大蒲」(『津軽信政公事蹟』)であった(工藤睦男編1984『木造町史近世編』下巻,p,30)。

11)著者不詳『津軽見聞記』（青森県立図書館1930『宝暦　津軽見聞記』「青森県立図書館叢書」第一篇)p. 17

12)著者不詳『広須組三新田農術覚書』(葛西善一ほか編1993『津軽の農書』みちのく双書第36集)p.101. 本書は安永2(1773)年の編集だが原本はより古い時代に成立したと考えられる(『津軽の農書』佐々木隆次氏による解題)。「新田さる毛地蒲地の畔は深く放を善とするもの也浅ければ土湿抜かね宜からず是等は土地にも寄べきか勿論さるけの田地など畔岸浅ければ苗植て抜稲の生立も悪しく稔劣れる事也」と記される。芦沼の惣四郎(-1774)が著したという通称『惣四郎農書』(工藤睦男編1987『木造町史　近世』下巻pp.254-262所収)に同様の記述があり「新田さる毛蒲地の畔は深く放つを善とする物なり深ければ土湿ぬけかねよろしからず」「扨さる毛地などはからさかきして是を用ひ耕水を懸、塊かき中掻きしても深田ハ馬足叶はぬゆへ鍬にても擺も有」と記される。同書はこれが津軽最初の農書であるとしている(同左pp.254-255)。

13)菅江真澄『そとが浜風』(内田武志宮本常一編1971『菅江真澄全集』第一巻)p.275. 天明5(1785)年8月11日の条。

14)菅江真澄『雪の出羽路』（内田武志宮本常一編1976『菅江真澄全集』第六巻)p.251. 文政7(1824)～同9年に地誌編集の目的で執筆されたもの。

15)比良野貞彦『奥民図彙』(山田龍雄ほか編1977『日本農書全集』1)p.148. 天明～寛政年間(1781-1801)ころの著作。

16)松浦武四郎『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969,時事新書『東奥沿海日誌』)pp.43,48,49. 嘉永3(1850)年の著作。

17)青森県立郷土館1998『「再賀の民俗」調査報告書』青森県立郷土館調査報告第42集・民俗－21,p.61

18)青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ2008『岩木川流域の民俗』（青森県史叢書)p. 81

19)青森県史編さん民俗部会2014『青森県史　民俗編　資料　津軽』pp.32,171,188　**20)**青森県史編さん通史部会2018『青森県史通史編3　近現代　民俗』p.711

21)五所川原市編1993『五所川原市史　史料編』1,pp.459-460　**22)**青森県木造地区農業改良普及所編1982『森田村生活誌　さるけと詩のなかで』p.61

23)弘前大学民俗研究部1984『木造町民俗調査報告書　こまおどり』p. 27

24)野本寛一2005「平地水田地帯の民俗－津軽の『サルケ』を緒として」弘前学院大学地域総合文化研究所編2005『地域学』三巻,p.67

25)「角川日本地名大辞典」編纂委員会編1985『角川日本地名大辞典』2　青森県,角川書店p.1283

26)前掲注17)『再賀の民俗』,p.1　**27)**佐藤公知編1954『西津軽郡史』,西津軽郡史編集委員会,p.783　**28)**平成30年10月末現在,つがる市役所。

29)前掲注25)『角川日本地名大辞典』,p.1283　**30)**前掲注27)『西津軽郡史』,p.779　**31)**稲垣村史編纂委員会編1969『稲垣村史』稲垣村,p.27

32)岸俊武1876『新撰陸奥国誌』巻第四十一,青森県文化財保護協会1965みちのく双書第十七集『新撰陸奥国誌』第三巻,p.163

33)前掲注25)『角川日本地名大辞典』, pp.1284,430　**34)**前掲注27)『西津軽郡史』,p.779　**35)**前掲注25)『角川日本地名大辞典』, pp.1284,430

36) ここでいう「ゴミ」とは、植物の繊維質のことだろうか。ゴミということばは「火に焚けば燃えるもので、今までは棄てて省みなかつたものの総称」であるという(柳田國男『火の昔』『定本柳田國男集』第二十一巻p.268)。また蒲原平野では「ゴミ」とは砂泥粘土をさし、ジョレンで除くことを「ゴミカキ」と称した(金塚友之丞1970『蒲原の民俗』p.1)。**37)**前掲注25)『角川日本地名大辞典』,pp.302-303を参考にした。

38)拙稿2018「青森県岩木川下流域におけるサルケ(泥炭)の利用(2)」青森県立郷土館2018『青森県立郷土館研究紀要』第42号,p.146

39)「サルケヤヂ」は一般名詞としても用いられるが、旧土滝村の北方には「猿毛谷地」という地名もあった。(岸俊武1876『新撰陸奥国誌』巻第四十一,青森県文化財保護協会1965みちのく双書第十七集『新撰陸奥国誌』第三巻,p.186)

40)平尾魯仙1855『合浦奇談』「卑湿地ベコ」(青森県立図書館編1969『青森県立図書館郷土双書第一集　谷の響』pp.195-196)

41)サルケの採取における女性や子どもの役割について言及している記録や論考は、管見では野本寛一2005「平地水田地帯の民俗－津軽の『サルケ』を緒として」だけである。　**42)**再賀では、「袋鍬の柄が大きく曲がっているもので切り起こして」採取したという（青森県立郷土館1998『青森県立郷土館調査報告第42集・民俗-21「再賀の民俗」調査報告書』p.61)。　**43)**前掲注38)拙稿2018,p142,155　**44)**家屋がまっ黒になることを「サルケ塗りだ」と形容したという。(森山泰太郎)　**45)**森山泰太郎・稲見五郎1977「奥民図彙・解説」日本農書全集1『耕作噺・奥民図彙・老農置土産・菜種作り方取立ケ条書・除稲虫之法』p.214　**46)**米兵来村時のエピソードは『稲垣村史』にもみられる。弘前駐留軍の米兵が稲垣村へ来たときに、饗応するにも材料がなく、先方に缶詰を提供してもらって交歓会を開いたという(稲垣村史編纂委員会編1969『稲垣村史』稲垣村,p.88-89)。　**47)**たとえば「岩木川下流域の集落では、夏に湿地からサルケ(泥炭)を掘り起こし、これを乾燥させて冬の暖房用の燃料とする」(「青森県史県　資料　津軽」p.171)と記される。他の例は注)6参照。　**48)**坂口豊1974『泥炭地の地学』東京大学出版会,p.30,pp.48-52　**49)**例えば「この地方(筆者注:岩木川下流域)は山がないため燃料である薪を入手するのが困難であった。それで、このサルケを掘り出して燃料とした」『青森県史　民俗編　資料　津軽』p.32、「山がなく薪が不足するため、サルケを燃料とした」『青森県史　民俗編　資料　津軽』p.188、「津軽地方の岩木川下流地帯では山林が少なく薪が手に入りにくく、サルケと呼ばれる泥炭を燃料とした」『青森県史通史編3　近現代　民俗』p.711など。注6参照。

50)野本寛一2005「平地水田地帯の民俗－津軽の『サルケ』を緒として」弘前学院大学地域総合文化研究所編2005『地域学』三巻,p.67,および拙稿2015,2016

51)この点について森山泰太郎は燃料採取と土地改良を「兼ねて」採取すると説明している（宮本常一,原口虎雄,谷川健一編1970『日本庶民生活史料集成』第十巻農山漁民生活「奥民図彙解説」p.253)　**52)**昭和3年に発行された書物によると、中津軽郡新和村、裾野村の一部(これらは岩木山の裾野に位置する村々である)でもサルケを焚いていたという(杉森文雄1928『青森県総覧』p.809)。　**53)**森山泰太郎1977『青森の伝説』(『日本の伝説』1977,角川書店)p.115

54)鳴海官蔵編1967『清明』p.14,狼森の環境衛生活動についての取り組み紹介から